



部屋のコーナーに設置が前提で設計されているため、後ろ側にはバツプルがなくクリプシュ型コーナーホーンの構造が覗き出しになっている。また、ホーンドライバーの上のカバーは固定されず、ウーファーキャビネットの上に載せられている。キャビネット後ろ右側にあるウーファーの取り付け用の板を外すとAK157ユニットが見える。このウーファーが取り付けられているバツプルと正面の美しいバツプルとの間には空間があり、ウーファー正面からの低音はこの空間を通過して、後ろ方向に転送されてから、設置された部屋のコーナーの両側から前に拡散。クリプシュ型ホーン構造が採用されている



とても優美なデザインのキャビネットで、両脇のスリットから低音が放出される構造となっている

# Retro-Future

古くて新しい もうひとつのヴィンテージオーディオ

ヴィンテージといえば、アルテックやタンノイなどが話題に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる、他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。ビンテージ・ショップ「アトリエJee-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのヴィンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。今号では1947年頃に発売されたVitavoxのコーナー型の大形ホーンスピーカーをご紹介することしよう。

## 第33回 Vitavox

1932年頃、イギリスのロンドンでペンヤングによって創立され、劇場やホールなどの業務用、録音スタジオのモニター用などのプロ向けの大型スピーカーを主力として製造していたメーカー。大型の劇場用システムBASS BIN、録音スタジオモニター用システムBITONE MAJOR、家庭用の大型システムCN-191 Corner Hornが日本ではよく知られている。ほかには15セルフホーンが搭載された超大型の劇場用システムや30cmのコアキシャルモデル等もあった。

本文/田中伊佐資

製品解説/岡田康司(アトリエJee-tee代表)

撮影/小林幹彦(彩紅舎)

### Vitavox CN-191 Corner Horn

1947年頃に開発されたコーナー型の大形ホーンシステム。ユニットにはこれまで同社が劇場や業務用に搭載していたユニットを導入し、優美なデザインに磨き上げた最上級モデル。中音域は金属製のホーンにドライバーが受け持ち、38cmウーファーとの2ウェイシステムとなる。キャビネットは部屋のコーナーでの設置を前提にクリプシュタイプの折り曲げ低音用ホーンが採用され伸びやかで解像度に優れた低音が部屋に広がっていく。サイズは760W×1,300H×684Dmmで、質量は115kg



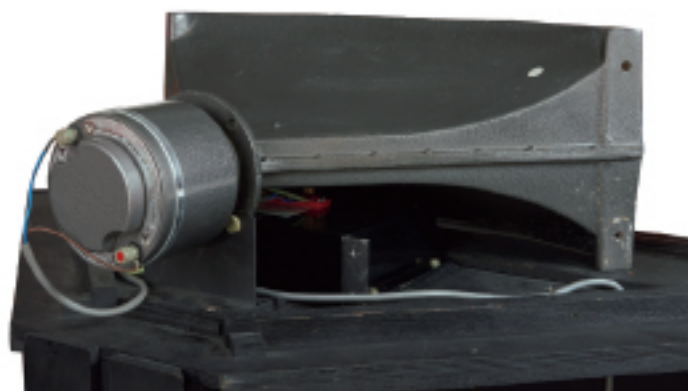
# Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

Vitavox



CN157ホーン+82ドライバー。低音キャビネット上にホーンとネットワークが載せられている。ホーンはアルミ製で正面に大きなスリットがない初期型と裏にスリットで4分割されている後期型があり、このホーンの下にはネットワークユニットが搭載されている



CN370ネットワーク。クロスオーバーは500Hzで、ピンを穴に挿入することで5段階の減衰調整が可能



初期型には付いて無く中期型以降はオリジナルのアルミ製の銘板がつくようになりデザインも年代によって数種類ある

美しい曲面のフォルムから精緻な質感ある音楽を再現

アトリエJee-teeでヴァイタヴォックスを聴くにはこれが2回目だ。1年前に別件で取材したとき、ちょうど入荷前になって、いい機会なので聴かせてもらった。それがなぜこの誌面に載らなかつたかといえば、細部をいじられていたらしく、オリジナルのピエアナ姿を見せた。岡田さんとしては、もうちょっと待ちましようとなったようだ。

そんなことで1947年に製造された中期モデル(もちろんステレオ時代なのでペア)が入ったというのでお店に駆けつけた。それは前オーナーが大事に扱ってきたことがにじみ出ている極上品で、音を聴く前にしげしげと曲面が美しいフォルムを眺めた。たとえば同じ英国製の大型ホーン、発売開始時期も近いタンノイ・オートグラフが威風堂々の佇まいであるのに対し、こちらは繊細で優美なデザインだ。面白いのは、ウーファーから放たれた低音をフロントの板に当て、側部と背部から出す構造だ。設計は40年代のモノラル時代、部屋のコーナーにセットティングして壁を利用して低音を伝えたい意図がうかがわれる。

試聴はステイキングの「イングリッシュ・マン・イン・ニューヨーク」からスタート。古めかしいレトロ感は一切なし。この曲が録音されたのは87年のデジタル時代だが、そのままのピチピチした音で再生される。立て板に水の口上を聴いているようなすがすがしさがある。大型スピーカーだが決して大味ではなくむしろ繊細な表情を見せている。

試聴室の都合上、コーナーに置くことはできなかった。それでも低音は十分に響いている。理屈で考えれば、低音は中高域より遅れているはず。しかし物理的にびったり合っているかどうかよりも、音楽的にグルーブ感があるかどうかのほうが大事で、僕はこの曲のビートに違和感なくのれた。

次にグールドのピアノソナタ。この滑舌の良さはタンノイとは異なるものだ。低音が当たったフロントの板も当然振動して音を出している。そのウッドな響きとピアノのボディの響きがうまくシンクロしているように感じる。

最後はフリッツ・ライナー指揮、シカゴ交響楽団の「ブラームス&チャイコフスキー・ヴァイオリン協奏曲」だ。オケのふくよかな成がりは格別だった。コーナーに置いたらどんなに素晴らしいかと思わせる。

ヴィンテージに似つかわしくないほど精緻な質感で、音楽に対する守備範囲が広い。これはまさに当たりの個体だろう。